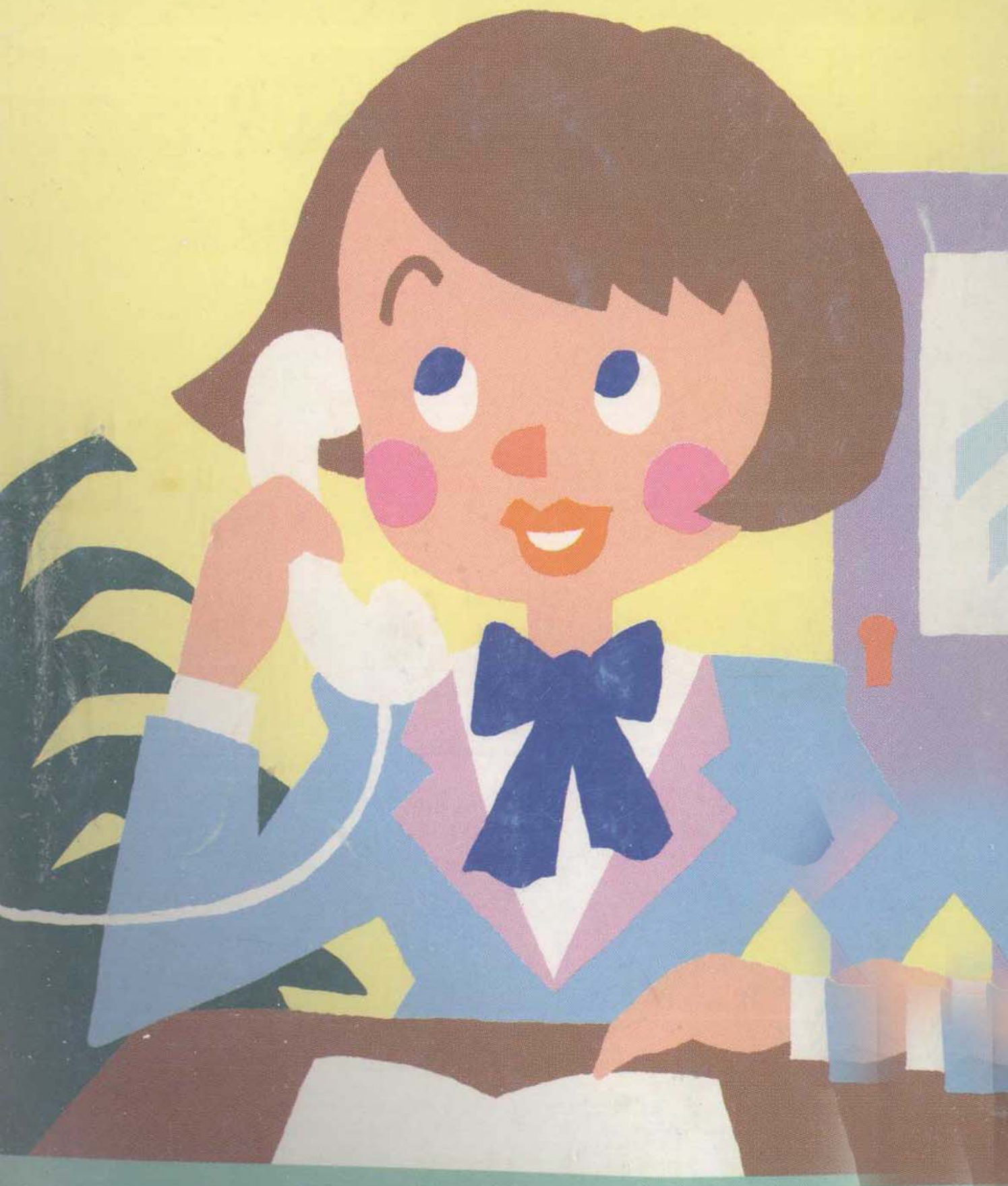


女社長に乾杯！

赤川次郎

下



新潮文庫

昭和五十九年十月十五日印刷
昭和五十九年十月二十五日発行

著者 赤川次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲專堂製本株式会社

© Jiro Akagawa 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-132703-3 C0193

新 潮 文 庫

女社長に乾杯

下 卷

赤 川 次 郎 著

新 潮 社 版

目次

試練のとき(続)	七
最後の賭け	三四
ストライキ突入	一〇六
因果は巡る	一八〇
エピソード	

解説 神津カンナ

女社長に乾杯！（下巻）

試練のとき（続）

こいつは手強い。

柳は、途中で写真を破つて捨てると、席へ戻つて、考え込んでしまった。

桑田伸子にしてもそうだが、竹野純子も、どうして一本筋の通つた娘だ。甘く見てかかったのは間違いだったようだ……。

柳は、伸子が社長になった、その晩に、彼女を夕食へ誘つたことがある。あわよくば、伸子を意のままに操つて、自分が社長の座へつこうと狙つたのである。

しかし、伸子が意外にしっかり者で、つけ入る隙がなかったと知ると、北岡と共に、伸子を失脚させるべく画策したのだった。

だが、どうもそれも難しい様子になって来た。伸子と純子のコンビは、そう簡単に切り崩せる相手ではない。

ここは一つ、新しい手を考えるときかもしれない。

柳がそう考えたのは、一つには、北岡にいや気がさして来たせいもあった。ブツブツと文句を言うだけで、肝心のことは何でも柳任せ。それでいて、自分が社長になるのだと思ひ込んでゐる。

あいつは社長の器うつわではない、と柳は思った。社長の器と言え、全く皮肉なことだが、桑田伸子の方が、遙はるかにその器だと、柳も認めないわけにはいかなかった。

これ以上、北岡のために働くのは、自分にとってマイナスに転じた、と柳は断定した。まず自分の身が第一。それがサラリーマン社会で勝ち残る唯一の鉄則である。

さて、それではどうすれば良いか。北岡と表面上は今まで通りやって行く。そして裏で、伸子に近付くのだ。——あの秘密を柳が握うっている限り、伸子を左右できる自信はあった。しかし、もろに出しては脅迫になる。何とか巧うまく、伸子が恩義を感じるように仕向けなくてはならない。

さて、どういう段取りで進めて行くか……。柳は、こういうことにかけては、人三倍ぐらい、頭の回転する男であった。

「——そうですか。どうも」

と、純子は電話を切った。「まだ尾島夫人は意識を取り戻さないそうよ」

「そう」

伸子は肯うなずいた。

「そんなに気にする必要はないわよ。もう危険は脱した、っていうし、心配ないんだからね？」

「頭では分かってるのよ。でもね、ついつい、考えちゃうの。——今日、帰りに見舞いに寄

りましょう」

そう言ってから、「そうだわ」

と、顔を輝かせた。

「いいことがあるわ」

「何なの？」

純子は、恐る恐る訊いた。伸子の「いい考え」というのは、往々にして、秘書を悩ませる類のものだからである。

「谷口さんに連絡してくれない？」

「いいけど——何の用なの？」

「尾島さんのご主人を、見舞いに来させてあげるといいと思って」

「ええ？ 本気なの？——いや、訊くだけ馬鹿だった。あなたの言い出しそうなことね。でも、谷口さんって、あんまり、偉くなさそうだから、巧くできるかどうか……」

と純子は受話器を外しながら、勝手なことを言い出した。

「谷口さんを。——竹野と申します」

谷口も、やっとさっきのチュツの一件から立ち直れたようで、元気のいい声を出している。「いや、なるほど」

純子の話を聞いて、谷口はすっかり感動したようすで、

「さすがに純子さんだ。本当に心の優しい方ですねえ」

こう言われては、自分の考えでないとは言ひ辛い。くすぐったい思いで、
「どうも。——そんなこと、可能かしら？」

「大丈夫だと思います。任せて下さい」

谷口は大きく出た。

谷口刑事も多少の影響力はあるとみえて、次の日には、尾島一郎を、入院中の夫人に面会させる許可がおりた。

電話で知らせてきた谷口へ、

「さすがに谷口さんね。きつと巧くやってくれるって、伸子さんにも言つてたのよ」と純子は上機嫌で言つた。

「そうおっしゃっていただく……。まあ、尾島を取り調べている連中も、夫人に会わせれば、気持ちをほだされて尾島が自白するんじゃないかと期待してるようです」

「なるほどね」

「今日の夕方四時半に病院の方へ行きます」

「谷口さんは行くの？」

「純子さんはどうなさるんです？」

「私は社長のおともでついて行くわ、当然」

「じゃ僕も行きます」

刑事の仕事って、こんなにいい加減なのかしら？ 純子は首をひねった。

「純子さんたら、調子いいのね」

伸子が笑いながら言った。「谷口さんはあんまり偉くないから、あてにならない、って言うってたじゃないの」

「嘘も放言よ」

「——方便、でしょ」

「あ、そうか」

こちらも頼りない秘書である。

病院へ問い合わせてみたが、尾島夫人はまだ意識不明のままという返事だった。

「私たちが行っても邪魔かしら？」

と伸子が言った。

「いいじゃないの。尾島社長がどうしてるかも見たいし。めったに見らないわよ」
まるで珍獣扱いである。

四時になると、社長と秘書は〈外出〉ということになった。

「果物でも持って行きましょう」

と、ビルを出た所で伸子が言った。

「でも、意識不明じゃ食べられないのよ。包み紙だけ持ってつたら？」

「まさか」

ともかく果物のバスケットを買って、タクシーで病院へ向かう。

四時二十五分頃には玄関前へ着いたのだが、別に目立った警備もなく、ただ制服の警官が二人、玄関の近くに目立たないように立っているだけだった。

「まだ暑いわね」

伸子が息をつきながら言った。玄関に入ると、谷口が受付の所から手を振りながらやって来た。

「——尾島さんはまだ？」

「ええ。もう来る頃です。さっき、向こうを出ると連絡がありましたから」

「奥さんの方は、どんな具合かしら？」

「医者のお話では、そろそろ意識が戻りかけていると言うんですがね。亭主が来るまでに気がついてくれれば、何か分かると思うんですが……」

「——あ、あの車かしら」

と純子が指さした。パトカーが三台、連なつてやつて来ると、玄関前に止まる。

「純子さん」

伸子は純子の腕をつかんで、「私たちはどこかへ引っ込んでいきましょう」

「え？ どうして？」

「尾島さんが私たちを見れば面白くないはずよ」

「こっちは面白いわ」

「だめ。必要以上に人を傷つけちゃいけないわよ」

「はいはい。社長のご命令とあらば……」

純子は肩をすくめた。受付のカウンターの向こうへ回って、入って来る尾島たちに見られないように身をかがめる。

玄関から、がやがやと男たちが入って来る。

「病室はあっちです」

と谷口が説明している。

「妻の容態は？」

と、懐かしい——というほどのこともないが——尾島一郎の声がした。

「それは向こうで担当の医者が説明しますよ。さあ、ともかく——」

ゾロゾロと、七、八人の一行が歩き出す。純子と伸子はそつと頭を出して、その様子を見た。

尾島一郎は、そう思ったほどやつれもせず、相変わらず尊大な、ふてくされたような態度で歩いている。手錠をはめられているのと、ネクタイがなくて、えりのところがはだけているのが、容疑者らしいところと言える。

「ずいぶん偉ぶってるじゃない」

と純子はそれを見送って言った。

「思ったより元気そうね。ホッとしたわ」

と伸子が言うと、純子はずまらなそうに、「がっかりしたわ。髪はモジャモジャ、ヒゲはのび放題、ボロボロの服に、足を鎖か何かでつながれて来るかと思つたのに」

「モンテ・クリスト伯じゃないのよ」

伸子が苦笑した。「私たちも後からついて行きますよ」

刑事たちに挟まれて歩いていく尾島一郎の後から、少し離れて伸子と純子について行つた。病室の所へ来ると、谷口がドアをノックする。ドアが開いて、尾島や刑事たちが中へ入つて行つた。廊下に、刑事が二人残つて立っている。

「——見舞いなんですが」

と純子が刑事に声をかけると、

「今はちよつと困ります。後にして下さい」

と、すばやく断られる。

するとドアが少し開いて谷口が顔を出した。

「あ、純子さん。——どうぞ」

「いいのかしら？」

「ええ。隅の方に入っていて下さい」

「分かつたわ」

そつと室内へ滑り込むと、伸子と純子は、目立たないように、隅の方の、何に使うのかよくわからない機械の陰に入つて顔だけを覗かせた。

尾島一郎が、眠り続ける妻のベッドの前に立って、じつと見下ろしている。

「命に関わるほどのことではありませんでした」

と医師が説明する。

「ガス自殺しかけた、と……。本当ですか？」

と尾島が訊いた。

「まあ、事故ということもあり得ますが、おそらくは自殺しようとなさったんじゃないでしょうかね」

「その……誰かに殺されかけた、とか……」

尾島の言葉に、伸子と純子は顔を見合わせた。刑事たちも、素早く視線を交わし合う。なぜ、夫人が殺されかけたと尾島は考えたのか。そんな理由があるのだろうか？

「さて、それは——」

医師にそんなことを訊いても無理というものだ。

「本人が意識を取り戻したら訊いて下さい」

「いつ頃でしょう、それは？」

「分かりませんな。本来ならとくに目を覚ましていてもいいのだが」

「まさか、このまま……」

「昏睡状態が続く、ということですか？ いや、その点は大丈夫。その心配はありません」

「そうですか」